

迎接祭聖体礼儀

単音聖歌譜



司祭祈禱

注意 譜面中、五線譜上に ||o|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまうたりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

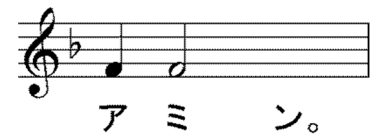
2024年02月15日 一部改訂

釧路ハリストス正教会

管轄司祭ステファン内田圭一

司祭) (黙誦：天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者
 よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を
 もるもろ けがれ いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま い たか
 諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。至と高き
 こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ い たか こうえいかみ
 は光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高きには光榮神に
 き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ しゅ わ くちびる ひら しか わ
 歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、主よ、我が唇を啓けよ、然せば我
 くち なんぢ さんび あ
 が口は爾の讚美を揚げんとす、)

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世に、



【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス

トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び
彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



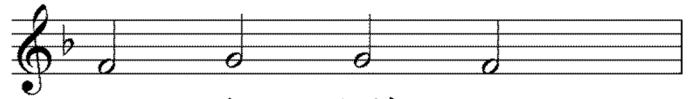
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限

なく、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の

聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩澤と爾の

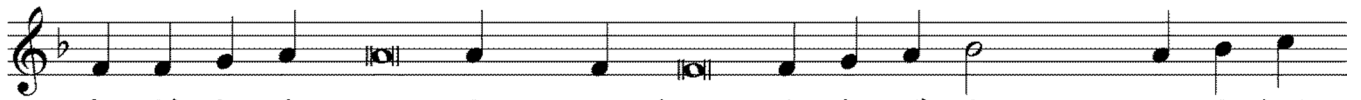
愛憐とを施し給え、)

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

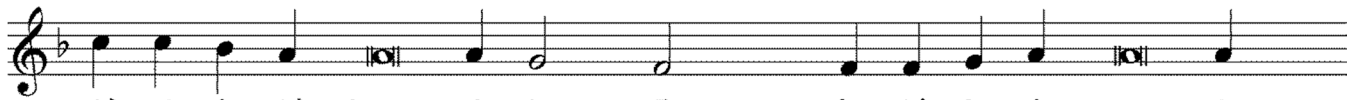


ア ミ ン。

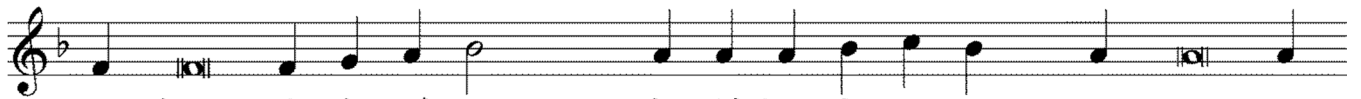
【 第一アンティフォン 第102聖詠 】



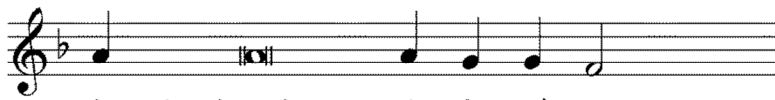
わ が た ま し い よ 、 しゅ を ほ め あ げ よ 、 しゅ よ な ん
我 靈 主 讚 揚 主 爾



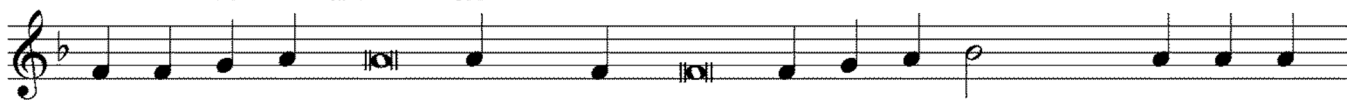
ぢ は あ が め ほ め ら る 。 わ が た ま し い よ 、
崇 讚 我 靈



しゅ を ほ め あ げ よ 、 わ が ち ゅ う し ん よ 、 そ の せ い
主 讚 揚 我 中 心 其 聖



な る な を ほ め あ げ よ 。
名 讚 揚



わ が た ま し い よ 、 しゅ を ほ め あ げ よ 、 か れ が
我 靈 主 讚 揚 彼



ことごとくのおんをわするるなかれ。
 彼れはなんぢがもろもろのふほうをゆるし、
 なんぢがもろもろのやまいをいやす。
 光栄はちちとこいとせいしんにきす。
 いまあもおいつもよよに、アミン。
 わがたましいよ、しゅをほめあげよ、わがちゅう
 しんよ、そのせいなるなをほめあげよ、
 しゅよ、なんぢはあがめほめらる。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわしゅいの
 我等復又安和にして主に禱らん、



しゅあわれめよ。
 主憐

司祭) かみなんぢおんちようもつわれらたすすくあわれまも
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

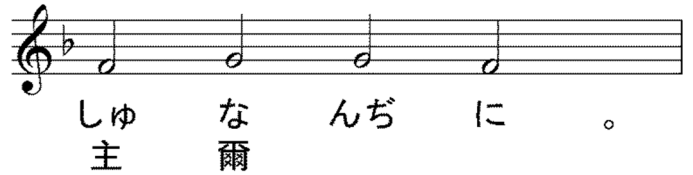


しゅあわれめよ。
 主憐

しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゆわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい
司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから
の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力

もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか
を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
司祭) 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 第二アンティフォン 第145聖詠 】

わ が た ま し い よ しゆ を ほ め あ げ よ 、 わ れ い け
我 靈 主 讚 揚 我 生
る う ち しゆ を ほ め あ げ ん 。 わ れ ぞ ん め い の う ち
中 主 讚 揚 我 存 命 中
わ が か み に う た わ ん 。
我 神 歌
ぼ く は く を た の む な か れ 、 す く う
僕 伯 特 母 救
あ た わ ぎ る ひ と の こ を た の む な か れ 。
能 人 子 特 母

しゅ は た び び と を ま も り 、 み な し ご と
 主 は 羈 人 を 護 孤 子
 や も め と を た す け 、 た だ ふ け ん し ゃ の み ち を
 寡 婦 を 佑 惟 不 虔 者 途
 く つ が え す 。
 覆
 しゅ は え い え ん に お う と な ら ん 。 シ オ ン よ な ん ぢ
 主 は 永 遠 王 爾
 の か み は よ よ に お う と な ら ん 。
 神 世 世 王

【 神の獨生の子 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 何 時 世 世
 か み の ど く せ い の こ な ら び に こ と ば よ 、
 神 獨 生 子 並 言
 し せ ざ る も の に し て わ れ ら を す く わ ん が た め
 死 者 我 等 救 爲
 あ ま ん じ て せ い な る し ょ う し ん ぢ ゃ ・ え い て い ど う ぢ ゃ
 甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女
 マ リ ヤ よ り み を と り 、 か み の せ い を か え
 身 取 神 性 を 易

ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、
 人 十 字 架 釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスカみよ、
 死 以 死 踏 破 神

せいさんしゃのいつとしてちちとせいしんとと共
 聖 三 者 一 父 聖 神 共

もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす
 讚 榮 主 我 等 救

くいたまあえ。
 給

【 小聯禱 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ しゅ いの}我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ}
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら}
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく}
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ なんぢ に、
 主 爾

司祭) (黙誦: ^{われら こ こうどうわごう きとう たま かつ にさんにんなんぢ な よ あつ もの}我等に此の公同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる者に

^{そのもと ところ たま やく しゅ なんぢみづか いま なんぢ しよぼく ねがい その}
 も其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の願を其

^{りえき ため かな われら こんせ なんぢ しんり し らいせ えいえん}
 利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世には永遠の

いのち え たま
生命を得るを 給え、)

司祭) けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
蓋 爾 は善にして人を愛する神なり、我等光榮を 爾 父と子と聖神に献ず、今も

いつ よよ
何時も世に、



【 第三アンティフォン 眞福九端 】



ぎ い に う え か わ く も の は さ い わ い な
 義 飢 渴 者 福

り 、 か れ ら あ く を え ん と す れ ば な り 。
 彼 等 飽 得

あ わ れ み あ る も の は さ い わ い な り 、
 矜 恤 者 福

か れ ら あ わ れ み を え ん と す れ ば な り 。
 彼 等 矜 恤 得

こ こ ろ の き よ き も の は さ い わ い な り 、
 心 清 者 福

か れ ら か み を み ん と す れ ば な り 。
 彼 等 神 見

わ へ い を お こ の う も の は さ い わ い な
 和 平 行 者 福

り 、 か れ ら か み の こ と な づ け ら れ ん と す れ ば
 彼 等 神 子 名

な り 。

ぎ の た め に き ん ち く せ ら る る も の は さ い わ
 義 爲 窘 逐 者 福

い な り 、 て ん ご く は か れ ら の も の な れ ば
 天 國 彼 等 有

なり。

ひとわれのためになんぢらをののしりきいん
人我爲爾等話しりき窘

ちくし、なんぢらのことをいつわりてもろ
逐爾等事譎諸

もろのあしきことばをいわんときはなんぢらさい
惡言言時爾等福

わいなり、よろこびたのしめよ、
喜樂

てんにはなんぢらのむくいおおければなり。
天爾等賞多

司祭) (黙誦：主宰・主・我等の神、諸天に天使及び、天使首の品級と軍隊とを立て

て爾が光榮の奉事者となしし者よ、求む我等の入るに伴いて、彼の我等と

ともつとともなんぢしぜんさんえいせいてんしらいいたたまけだしおよ

そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、)

司祭) 睿智、肅みて立て、

【 聖入の句 】

しゅはそのすくいをあらわししよみんのめの
主其救顯諸民目

まえにそのぎをしめせり。
前其義示

【 迎接祭のトロパリ 第1調 】

おんちようをみちこおむるしょうしんどうていぢよ
 恩寵満被生神童貞女

よ、よろこべ、なんぢよりぎのひりすとすわれ
 慶爾義日我

らのかみ、くらやあみにあるものを
 等神幽暗在者

てらすしゅはかがやきいでたればなり。
 照主輝出

ぎなるおきなよ、なんぢもたのしめ、
 義翁爾樂

なんぢわがたましいのきゆうしゅ、われらにふく
 爾我霊救主我等復

かつをたもうものをいだきたればなり。
 活賜者抱

【 迎接祭のコンダク 第1調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、
 光榮父子聖神歸す、

いまもいつもよよに、アミン。
 今何時世世

ハリストスカみよ、なんぢはおのれのこうた誕
 神爾己降誕

んにてどうていぢよのはらをせいにし、よ宜
 童貞女腹聖いし、よ

ろしきにか かな いて シメオンのてに ぶくをく
合 手 福 降

だ し 、 いまわれらのために すくい をそな
今 我 等 爲 救 備

えたま えり ひと おり ひとをいつくしむ
給 獨 人 愛

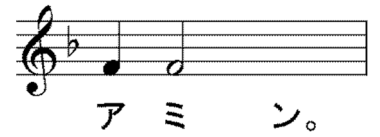
しゅよ わがくにをつねにへいわにし、
主 我 國 恒 平 和

なんぢのあいするきょうかいをかためたまえ。
爾 愛 教 会 固 給

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い なる か み 、 せ い なる ゆ う き 、 せ い なる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 の 者 我 等 憐

よ 。 せ い なる か み 、 せ い なる ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 の 者 我 等 憐

め よ 。 せ い なる か み 、 せ い なる ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い なる じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せ い しん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い なる じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い なる か み 、 せ い なる ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：^{しゅ な よ}主の名に依りて來たる者^{き もの あが ほ}は崇め讃めらる、^{ぎ もの なんぢ そのくに}ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の^{こうえい ほうざ あ つね あが ほ}光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、^{いま いつ よよ}今も何時も世に、)

【 ^{プロキメン} 提綱 生神女の歌 第3調 】

司祭) ^{つつし き}慎みて聽くべし、^{しゅうじん へいあん}衆人に平安、

誦經) ^{なんぢ しん}爾の神にも、

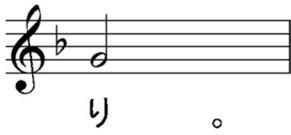
司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{わ たましい しゅ あが わ しん かみわ きゅうしゅ よろこ}プロキメン、我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

わがたましいはしゅをあがあめ、わが
 我 靈 主 崇 我
 しんは わが か み きゅうしゅをよろこべ
 神 我 神 救 主 悦
 り。

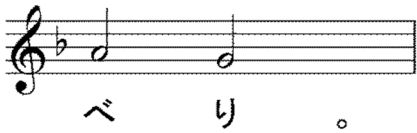
誦經) ^{けだしそのひ いや かえり いま のちばんせいわれ さいわい い}蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂わん、

わがたましいはしゅをあがあめ、わが
 我 靈 主 崇 我
 しんは わが か み きゅうしゅをよろこべ
 神 我 神 救 主 悦



り。

誦經) 我が 靈 は主を崇め、



べり。

【 アポストロス 使徒經 316 端 エウレイ書7章7節~17節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、小なる者が大なる者より祝福せらるるは一も論なきなり。且此には、十

ぶん 一つ と もの し ひと かれ おのれ こと かれ い しょう もの 分の一を取る者は死すべき人なり、彼には、己の事を彼は生くと、證せらるる者なり。

またか い じゅうぶん 一つ と ところ みづか よ じゅうぶん 又斯く言うべし、十分の一を取る所のレヴィイは、自らアヴラアムに由りて、十分の

一つ ぎょう けだし あ とき かれ なおそのちち み あ ここ 一を供せり、蓋メルキセデクがアヴラアムに遇いし時、彼は尚其祖の身に在りたり。是

を以て、民はレヴィイ司祭職の下に律法を受けたるが故に、若し此の司祭職に由りて

かんぜん う なん また はん したが た さい おこ 完全なることを得べくば、何ぞ亦メルキセデクの班に循いて他の司祭の興り、アアロンの

はん したが と な もの もち けだしさいしよく かわ とき りつぼう またかわ 班に循いて稱えられざる者を須いん。蓋司祭職の易る時は律法も亦易らざるを

え これら ことば さ ところ もの た しは ぞく すなわちそのうちいちにん さいだん 得ず。此等の言の指す所の者は、他の支派に屬すればなり、即其中一人も祭壇に

ほうじ しは けだしわれら しゅ い あきらか こし 奉侍せざりし支派なり。蓋我等の主がイウダより出でしことは明なり、モイセイは此の支

は おい さいしよく こと いつ い そのさら あきらか けだし に 派に於て司祭職の事を一も言わざりき。其更に明なるは、蓋メルキセデクに似たる

た さい おこ すなわちにくたい いましめ りつぼう したが あら むきゅう せいめい 他の司祭の興るなり、乃肉體の誠の律法に循うに非ずして、無窮の生命の

ちから したが もの けだししょう いわ なんぢ はん したが さい 能に循える者なり。蓋證するあり、云く、爾メルキセデクの班に循いて司祭と

な よよ いた
爲り、世に返らんと。

(比較用 口語訳) 言うまでもなく、小なる者が大なる者から祝福を受けるのである。その上、一方では死ぬべき人間が、十分の一を受けているが、他方では「彼は生きている者」とあかしされた人が、それを受けている。そこで、十分の一を受けるべきレビでさえも、アブラハムを通じて十分の一を納めた、と言える。なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを迎えた時には、レビはまだこの父祖の腰の中にいたからである。もし全うされることがレビ系の祭司制によって可能であったら——民は祭司制の下に律法を与えられたのであるが——なんの必要があって、なお、「アロンに等しい」と呼ばれない、別な「メルキゼデクに等しい」祭司が立てられるのであるか。祭司制に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずである。さて、これらのことは、いまだかつて祭壇に奉仕したことの無い、他の部族に関して言われているのである。というのは、わたしたちの主がユダ族の中から出られたことは、明らかであるが、モーセは、この部族について、祭司に関することでは、ひとことも言っていない。そしてこの事は、メルキゼデクと同様な、ほかの祭司が立てられたことによって、ますます明白になる。彼は、肉につける戒めの律法によらないで、朽ちることのないいのちの力によって立てられたのである。それについては、聖書に「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」とあかしされている。

【 アリルイヤ 迎接祭の 第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

Musical notation for the first line of the hymn. The melody is in G major (one sharp) and 4/4 time. The lyrics are: ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、

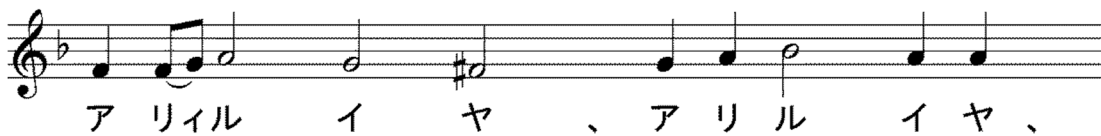
Musical notation for the second line of the hymn. The melody continues from the first line. The lyrics are: ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ} 主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ、

Musical notation for the third line of the hymn. The melody is the same as the first line. The lyrics are: ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、

Musical notation for the fourth line of the hymn. The melody continues from the third line. The lyrics are: ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{これ いほうじん てら ひかり およ なんぢ たみ さかえ} 是れ異邦人を照す光、及び爾の民イスライリの榮なり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} 念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ} を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} 所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし} よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

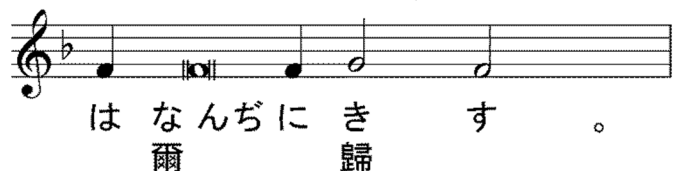
^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} 善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書7端 2章22~40節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とき ふぼ おさなご たづさ のぼ これ しゅ} 謹みて聴くべし、彼の時、父母は嬰兒イイススを携えてイエルサリムに上れり、之を主

^{たてまつ ため しゅ りつぼう しる ごと いわ およ はじ たい ひら なんし しゅ} に奉らん爲なり。主の律法に録されしが如し、曰く、凡そ初めて胎を開く男子は主

^{せい とな またしゅ りつぼう い ところ よ ふたつ やまぼとあるい ふたつ ひな} に聖なりと稱えらるべしと。又主の律法に言う所に依りて、雙の班鳩或は二の雛

ばと まつり ささ ため み な ひと こ ひとぎ
 鳩を 祭 に 獻げん 爲なり。視よ、イエルサリムにシメオンと名づくる人あり、斯の人義にして
 けいけん なぐさ もの ま しこう せいしんかれ のぞ かれ せいしん よ
 敬虔なり、イスライリを 慰むる 者を 俟ち、而して 聖神 彼に 臨めり。彼に、聖神に 由り
 しゅ み さき し み しめ かれしん よ でん きた
 て、主のハリストスを見ざる 先には、死を見ざらんと 示されたり。彼 神に 依りて 殿に 來れり、
 ふぼ おさなご たづき これ りつぼう れい おこな ため い とき かれ おさなご その
 父母が 嬰兒 イイススを 攜えて、之に 律法の 例を 行わん 爲に入りし 時、彼は 嬰兒を 其
 て と かみ しゅくさん い しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる
 手に 取り、神を 祝讚して 曰えり、主宰よ、今 爾の 言に 循いて、爾の 僕を 釋し、
 あんぜん ゆ けだしわ め なんぢ すくい み なんぢ ばんみん まえ そな もの
 安然として 逝かしむ。蓋 我が 目は 爾の 救を見たり、爾が 萬民の 前に 備えし 者なり、
 こ いほうじん てら ひかり およ なんぢ たみ さかえ およ おさなご はは
 是れ 異邦人を 照す 光、及び 爾の 民イスライリの 榮なり、イオシフ及び 嬰兒の 母は
 かれ かん い こと き かれら しゅくふく そのはは い み
 彼に 關して 言わるる 事を 奇とせり。シメオン 彼等を 祝福して、其 母マリヤに 謂えり、視よ、
 こ こ お うち おお もの たお また おこ いた かつばくろん しるし な
 此の子は 置かれて、イスライリの中に 衆くの 者の 頽れ 又は 興るを 致し、且 駁論の 號と爲
 らん、衆くの 心の 念の 露れん 爲なり、爾にも 劍は 靈を 貫かん。又 預言女ア
 ンナあり、アシルの 支派ファヌイルの 女なり、處女の 時より 夫と 偕に 居りし こと七載、
 としおおい お よわいおよそはちじゅうし やもめ でん はな ものいみ きとう もつ
 年 大に 老いたり、齡 約 八 十 四の 嫠にして、殿を 離れず、齋と 祈禱とを 以て
 ちゅうやほうじ もの かれ こ とききた つ しゅ さんえい かつこ おさなご こと およ
 晝夜 奉事せし 者なり。彼も 斯の 時 來り 就きて、主を 讚榮し、且 此の 嬰兒の 事を 凡そ
 イエルサリムに 在りて 贖を 俟つ 者に 語れり。既に 主の 律法に 遵い、悉く 之を 竟え
 ふるさと かせ こ ようや せいちょう せいしんますますきょうけん ちえ
 て ガリレヤの 故 邑ナザレトに 歸れり。子は 漸く 成長し、精神 益強 健にして、智慧
 み かみ おんちよう かれ のぞ
 充ち、神の 恩寵は 彼に 臨めり。

(比較用 口語訳) それから、モーセの律法による彼らのきよめの期間が過ぎたとき、両親は幼な子を連れてエルサレムへ上った。それは主の律法に「母の胎を初めて開く男の子はみな、主に聖別された者と、となえられねばならない」と書いてあるとおり、幼な子を主にささげるためであり、また同じ主の律法に、「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定めてあるのに従って、犠牲をささげるためであった。その時、エルサレムにシメオンという名の人があった。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。そして主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはない、聖霊の示しを受けていた。この人が御霊に感じて宮にはいった。すると律法に定めてあることを行うため、両親もその子イエスを連れてはいつてきたので、シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。父と母とは幼な子についてこのように語られたことを、不思議に思った。するとシメオンは彼らを祝し、そして母マリヤに言った、「ごらんささい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、

また反対を受けるしるしとして、定められています。——そして、あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。——それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」。また、アセル族のパヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。彼女は非常に年をとっていた。むすめ時代にとついで、七年間だけ夫と共に住み、その後やもめぐらしをし、八十四歳になっていた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって神に仕えていた。この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた。両親は主の律法どおりすべての事をすませたので、ガリラヤへむかい、自分の町ナザレに帰った。幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みとその上にあった。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ